張承志が求めたもの

武　永　尚　子

はじめに

張承志は、中華人民共和国成立の前年、1948年に北京の回族[1]家庭に生まれ、新中国の歴史とともに育った。文化大革命が勃発したときは清華大学付属中学[2]に在学しており、紅衛兵運動にはごく初期に積極的に参加している。「紅衛兵」という名前も実は彼が名付けたものだった。その後、「紅衛兵」は自分の思惑とは全く違った方向に進んで行き、文革収束後には「悪の象徴」とされた。彼は真面目であるが故に「紅衛兵」がずっと心の重みになっていた。

北京大学考古学系卒業後、各地の考古発掘作業に参加、さらに中国社会科学院の大学院に進み、少数民族として初めて『修士」の学位を取得した。専攻はモンゴル史で、文献による研究だけでなく、現地調査を重視する研究方法で注目された研究者であった。研究者として何度も来日しており、日本語も堪能である。

文革時代初期の『革命大串連」[3]で仲間と一緒に甘粛・青海・内モンゴルに行き、大自然の魅力を知った。その後、研究者として辺境の地を訪れるようになると、今度は、自然にも恵まれない、文化からも取り残されたような土地に住む人々の、心の温かさや強さを知ったのだった。それによって大学院に入った頃から書き始めた小説や詩も次第に作風が変わっていった。そして、ついに学者の道を捨て、専業作家になった。とはいえ、彼は他の作家とは一線を画しているかのように孤立している。その当たりの心情が、彼のライフワークとも言うべき長編小説『心霊史』の随所に見られる。『心霊史』の文を引用しながら、張承志という作家を浮き彫りにし

たいと思う。

1　作者紹介

1－1　清華大学付属中学入学まで

張承志にとっては、文化大革命は人間形成に大きな影響を与えたので、彼の初期の作品にはかなり文革の影が見られる。しかし、正面から自分と文革や紅衛兵の関係を明らかにすることはなかった。それを日本滞在中に岩波書店の担当者から依頼され、1991年に月刊雑誌『世界』に『私の作品「紅衛兵」』として４回シリーズで発表したのだった[4)]。この文章をもとに、その後ジャフリーヤ教派と出会い、６年がかりでジャフリーヤ教史とも言うべき『心霊史』を完成したことまで書き著したのが、岩波新書の『紅衛兵の時代』である[5)]。この『紅衛兵の時代』の記述を追いながら、作者張承志を紹介する。

張承忘は1948年北京に生まれた。本籍は山東省済南市だが、両親は40年代初めに北京に来て、共産党の地下革命活動に参加し、イスラム系兵士の反戦組識作りに従事していた。父親は張承志が幼い頃亡くなり、家は母親方の祖母・母・姉２人と彼の５人家族だった。母親は非常に教育熱心な女性で、事務員をしながら、雑草を食料としながらも、子供３人を大学に進学させることを目標としていた。

1－2　清華大学付属中学時代

彼は1964年、名門清華大学付属中学に入学する。清華付中生の三分の一は革命幹部の子女であった。国民党関係者・資本家・地主・富農といった「出身の悪い人」が、いくら成績がよくても大学進学のチャンスがないなどの差別を受けていたのに比べると、彼らは非常に優遇されていた。それでも、特別扱いされないことに不満を抱いて騒動を起こし、激しい討論が始まった。1966年５月には、討論は全学的規模に拡大した。そんな折、中国社会全体で文化大革命の第一歩と考えられる政治運動が始まった。清華付中の党支部もこの運動に、壁新聞を教室に貼り出す形で参加

した。その時署名したグループ名の一つが、張承志が名付けた「紅衛兵」だった（この時の壁新聞は、その後、町にあふれた壁新聞とは無関係である）。

その後、学校当局に挑戦するために全学的組織が結成され、その署名に『紅衛兵」の名前を使用することが決められた。つまり「清華付中紅衛兵」の誕生である。ちょうどその頃、中国では教育制度丸ごと崩壊という、天地がひっくり返るような変化が起きていた。その時、各中学で同じ「紅衛兵」という名称の組織が結成されていった。清華付中とは異質の紅衛兵誕生だった。

6月には工作組がやってきて、学校の指導権は工作組に掌握され、工作組と清華付中紅衛兵の敵対関係は日増しに厳しさを増していった。7月下旬には周恩来総理、毛沢東主席も清華大学の大会に出席した。そして自分たちが書いた手紙に、毛沢東は「清華付中紅衛兵への手紙」と題する返事をくれたのだった。現在では毛沢東のことを、悪辣な陰謀家だったと言われているが、この手紙からは彼の真面目さと誠意、普通の人と平等に討論したいという願望、紅衛兵の中にある危険性に対する憂慮が読みとれるとして、作者は現在でも毛主席に対して絶大なる信頼感を抱いているのである。

8月中旬『革命大串連」が始まり、張承志は前後3回このチャンスを利用して、普段では行けないような辺境の地に行き、色々貴重な体験をした。その間に「紅衛兵」は大変な変貌を遂げていた。血統のよい家庭の出身者のグループも『紅衛兵」を名乗るようになっていたし、全国の工場や農村を含む様々な大衆組織が「紅衛兵」を自称していた。「紅衛兵」はもはや自分たちとは全く無関係の存在になっていた。

1968年夏、北京市が中高生に対して、モンゴルの遊牧区や東北へ赴くよう呼びかけた[6]のに応え、張承志は内モンゴルを選んだ。

1－3　内モンゴルでの生活

内モンゴルの東ウジュムチン旗に着いた後、張承志はハンウラ生産大隊に配属された。紅衛兵たちは厳しい環境の中で繰り返される過重な肉体労働によって成長し、元紅衛兵相互間の関係は薄くなっていった。誰も、一生涯牧民として暮らすことを

本心から望んでいたわけではなかったが、底辺の人々の生涯をじかに見て、各自生き方が変わった。

張承志のグループが、現地の人々の利益のためにやったことは（1）学校を作ること、（2）井戸を掘ること、（3）医療活動をすること、であった。それまで牧畜区には小学校もなかったのだ。彼らは小学校を作るに当たって、４つの牧畜区を巡回して運営すること、張承志が教師の役をすることを決めた。彼は猛勉強してモンゴル語をマスターし、自分でモンゴル語のテキストを作り、モンゴル語でモンゴル族の子供たちを教育したのである。井戸掘りは、零下40度という厳寒の地においては非常に困難なことだった。いくつか目にやっとよい水脈に当たって作った井戸は、彼らが去った後もずっと「知識青年の井戸」と呼ばれているという。文革当時「はだしの医者」が流行したが、ここでは『馬上の医者」を実行していた。医療知識のある女子生徒数人が、風雪の中でも深夜でも、病人が出れば、馬に乗って出動した。こうして元紅衛兵たちは基層に生きる人々の立場で物を考える知識人になっていった。

１－４　大学進学から専業作家になるまで

作者は４年間草原で暮らした後、北京大学考古学系に進学した。当時は自分の希望で進学したのではなく、職場の推薦によったのであるが、彼が所属していた大隊では30人近い知識青年のうち、約三分の一が大学に進学した。

大学を卒業すると中国歴史博物館に配属された。考古隊員として14省にわたる多くの発掘作業に携わる中で、現地の人々と触れあうことによって、底辺の人々の心を実感したのだった。

1978年、中国科学院の研究生院（日本の大学院）に入学し、モンゴル史研究の道に入った。文学作品を発表し始めたのはちょうどその頃で、内モンゴルの草原をテーマとした『騎手はなぜ母を歌うのか』『黒駿馬』などの小説で文学賞を受賞している。約10年間、新彊地区でモンゴル人の生活の跡をたどるという研究を進めていたが、伝統的研究方法では、自分が肌で感じる遊牧民の心情は表現できないと考え

るようになり、学問を捨てて専業作家になった。

1－5　ジャフリーヤ教派との出会い

張承志は1984年に西北の地でジャフリーヤと運命的な出会いをする。ジャフリーヤは200年の殉教の歴史を持っており、信者は約60万人、全国に散在しているが、集中しているのは西北地区である。清朝以来、この教派はその時々の政府に反旗を翻してきた。教徒は性格が烈しく、信仰のためにはいつでも犠牲になる覚悟をずっと持ち続けている。

文革時代、紅衛兵として行動を共にした仲間たちが、当時のことを全面否定するのを見るにつけ、紅衛兵時代の初心が忘れられない、理想主義、体制反逆の情熱が忘れられない張承志は、その頃悩みに悩んでいた。そんな時ジャフリーヤに出会ったのである。彼は6年間ジャフリーヤ地区に通った。やがてジャフリーヤは彼を全面的に信頼して、ジャフリーヤの歴史を1冊の本にまとめるよう求めた。そのために、ジャフリーヤの清真寺[7]の学生30人が、各方面での調査を担当してくれ、清朝以来極秘とされてきたアラビア語・ペルシャ語の歴史書6冊が中国語に翻訳された。張承志は新疆や雲南・黒竜江など遠方まで調査して回ったが、どこでも案内人が付き、宿も食事も用意されていた。

ジャフリーヤの全面的な協力の下、ジャフリーヤの宗教史、さらに張承志のライフワークとも言うべき『心霊史』が1990年夏に完成した。自分とジャフリーヤとの関係について彼は次のように言っている。

> 自分は回族の家庭に生まれた。しかしジャフリーヤ教徒との関係がこうした血縁によるものとは考えていない。宗教の情熱が政治的情熱に取って代わったとも思わない。これは、一人の紅衛兵が人民の中に自己の真の母親を見つけ出す過程である。紅衛兵はかつて特権の影を引きずっていたが、底辺の人々と接するうちに、それを取り除くことができた。紅衛兵が持っていた造反、反体制の精神は結局、精神の自由の回復を目指す基層人民の闘いと結びつくことができた。つまり、20年かけて官僚批判を続けた末に、中国の民衆のもとに戻った

のだ。私自身のケースはその一例にすぎない。一人の紅衛兵として、捨てるべきは捨て、堅持すべきは堅持し、私はジャフリーヤにたどりついた[8]。

2　中国におけるイスラム教発展史

現在中国における回族は860万人（1990年）、そのうちの半数がイスラム教を堅持している。中国イスラムには40ばかりの教派団体があり、ジャフリーヤはそのうちのひとつである。

中国イスラムの歴史については、清末・中華民国時代から現代まで、金吉堂『中国回教史研究』（1935年）、傅統先『中国回教史』（1940年）、馬以愚『中国回教史鑒』（1940年）、白寿彝『中国回教小史』（1944年）など、著作は少なくない。ここでは、張承志が各種の資料を参考にしてまとめた『回教から見た中国』（1993年中公新書）から、必要な部分を抜き出す形で、中国イスラムの歴史を紹介する。

2－1　唐代から明代まで

世界三大宗教の一つであるイスラム教は西暦610年にアラブの預言者[9]ムハンマド[10]によって唱えられたものである。中国には、すでに7世紀から8世紀にかけてアラブやペルシャから伝えられている。当時の長安では、西域から来た兵士・商人・歌姫・宗教者・通訳・楽人、さらに人質として送られた各王室の子弟など、さまざまな職業・身分が見られた。唐代は宗教信仰の自由が認められていたので、仏教・道教・景教・ゾロアスター教・マニ教・イスラム教などが見られ、中国文化に新鮮な空気を注いでいた。広州では西域船に対して「不検閲」という優遇策をとっていたので、20万人もの西域人が住みついたという。7世紀に陸路（天山山脈の南北のシルクロード経由）と海路（インド洋経由）で中国にやって来たイスラム系の外国人は、当時「蕃客」と呼ばれ、住まいを与えられるなど優遇されており、自治も認められていた。外国人と中国人の結婚も自由だったので、混血が多く出現し、次第に中国化していった。

宋の時代にイスラム教徒は「回回」と呼ばれるようになった。南宋滅亡の決め手となったのは、泉州のイスラム教徒であった。元代には、チンギス・ハーンに滅亡させられた中央アジアのイスラム教徒の技術者・職人・軍人などが大勢中国に連れて来られた。文化水準の低い元朝の支配者は、都市の管理を回回に依頼した。これによって回回は全国に散らばったのである。元の時代、政治・財政に携わった上層部も、商業・農業にかかわった下層部も、回回はさらに中国化し、使用言語も中国語に変わった。

しかしモンゴル人はイスラム教徒の家畜処理の意味や必要性を理解できず、モンゴル式の処理を強要したり、モンゴル人の子供に割礼してはいけない、と言う形で布教を禁止したため、イスラム教は広まらなくなった。元代、一部の上層階級を除くと回回は貧困だった。特に都会では「下九流」の職にしかつけなかった。

２－２　清朝時代

中国イスラムは、元代に量的に広がったのに対して、清代は質的に高まり、社会に浸透した時代であった。

満族出身の清王朝はイスラム教に対して、儒教・道教・仏教という正統的な宗教と同等ではないが、寛容な態度をとっていた。厳しくなったのは乾隆年間（1736～1795)、それも後期のことである。宗教戦争から反乱に発展し、その反乱に清朝が手を焼いたためだった。清代に起こった大規模な反乱としては次の４つが挙げられる。（１）順治４年（1647年）甘州米喇印・丁国棟起義　（２）乾隆46年（1781年）循化蘇四十三起義　（３）乾隆48年（1783年）石峰堡田五起義　（４）同治元年～10年（1862～1871年）西北回民大起義である。このうち（２）と（３）はまさにジャフリーヤの反乱そのものであり、（４）は太平天国一支派として、新彊・西北・雲南で起こった回回による大反乱である。この反乱の中心人物は、陝西の白彦虎、雲南大理の杜文秀、雲南東溝の馬聖麟、寧夏金積堡の馬化龍であった。馬聖麟と馬化龍はジャフリーヤである。ジャフリーヤ教徒は現在60万人、中国全体のイスラム教徒の数パーセントを占めるにすぎない。この教派が、かつて乾隆帝や同治帝に頭

を抱えさせるような反乱を起こしたという事実、ジャフリーヤ200年の歴史の中で少なくとも50万人の教徒が犠牲になっているという事実がこの教派の特徴を表している。

ここでスーフィズムについて少し説明しておく。スーフィズム（神秘主義）が中国に伝えられたのは元代であるが、民衆運動となったのは清の乾隆時代である。スーフィズムは、個人とアッラーとの間の神秘的な接近と個人の聖的な感覚、とくに奇跡と聖徒をイスラム本来の儀式よりも強調する。聖徒に持たされる真のイスラムを信じていけば奇跡が実現され、苦しみに満ちた生涯から飛び出し天国に行けるという教義である。18世紀、中国にはフィーヤ派・ジャフリーヤ派・カーディリーヤ派の３つのスーフィズムの教派があった。

ジャフリーヤについては後で詳しく述べるが、この教派は、道祖馬明心が清政府に殺害されたことから反乱を起こしたのを皮切りに、何度も反乱を起こし、その死を恐れぬ闘いぶりは乾隆帝をはじめ、代々の皇帝を震え上がらせた。そのためジャフリーヤは弾圧されたが、イスラム教全体が禁止されることはなかった。それまで回民集中地城には掌教という管理役が置かれ、かなり自治が認められていたが、乾隆帝はジャフリーヤ対策として、政府のお目付役的な「郷約」を置き、回民の動きを監視した。

２－３　民国時代

軍閥抗争が吹き荒れた民国時代、寧夏・青海・甘粛など西北の地は３つの馬姓の軍閥によって支配されていた。これらはいずれも清代の回民反乱の時、政府側に降伏した後、政府側に寝返って同族の民衆を弾圧し、その功績によって勢力を伸ばし、軍閥にまで発展したものである。そのうちの一人馬歩芳は、イスラム原理主義イフワーン教義を青海の「国教」として、各派の教徒を改宗させた。その後このイフワーン派は次第に中国全土に広がっていった。

清代130年間禁止されていたジャフリーヤ派は、同じ反清であったとの理由で解放されたが、1939年の国民党役人によるイスラム侮辱事件の時、また蜂起してしま

った。３年にわたる戦闘の末、指導者が殉教し、これによってジャフリーヤはまた窮民の立場に戻された。

民国時代、軍閥のなかにはイスラムを敵視して、モスクやゴンバイ[11]を破壊する者もいた。イスラム教徒は貧困・職業の不安定・低い社会的地位・劣悪な居住区などの悪条件を抱えていたが、その悪条件・生存の厳しさが信仰の敬虔さを堅固なものにした。

２－４　共産党政権になってから

民国時代、国民党は回民のことを「宗教信仰が違う、特殊な生活習慣をもつ国民」として、ひとつの民族としては認めなかったが、当時の共産党は「回民はひとつの圧迫された民族」「回民が受けていた差別と圧迫は階級闘争によるものである」と解釈していた。

新中国建国後、中国共産党は土地改革を開始し、スーフィー派の回教地域でゴンバイの土地を没収しようとして回民による反乱を起こされた。それを共産党は、教内上層階級の扇動によるものだと解釈した。少数民族政策によって、内蒙古・新彊・チベット・広西・寧夏に自治区が誕生し、さらにその下に自治州・自治県が設けられた[12]。イスラムを信仰する回民が回族というひとつの民族であると認められたのである。しかしスーフィーに関しては、イスラム教内でも敵視されていて、残虐な大迫害が行われた。50年代後半の自然災害が追い打ちをかけて、処刑・獄死・餓死など併せて２万人以上の被害が出たと言われている。

文革中は、宗教活動が強制的に停止させられ、モスクは閉鎖された。毛沢東思想が唯一の真理とされていたので、回民の中には自分たちの革命性を証明するために、自らすすんで豚を飼い、豚肉を食べて信仰を捨てた人もいた。都市の青年の中にはイスラム教信仰だけでなく、回族であることさえ隠す者が多くなった。文革中の恐怖感とその後の経済主義の影響で、多くの都市回族が信仰者とは言えなくなっている。

その中でジャフリーヤは固い信仰を守り続けている。蘭州の馬明心のゴンバイは

1958年に破壊され、80年代になるとその土地にビルが建てられ、83年には馬明心の遺体が置かれていた場所も工事が始まろうとしていた。ジャフリーヤ教徒は死を覚悟でその場所に住みつき、その周辺もジャフリーヤ回民であふれた。結局、政府とジャフリーヤの代表アホン[13]が話し合い、ゴンバイはジャフリーヤに返還された。1985年３月馬明心ゴンバイが復興したが、これ以降、中国各地のイスラム教・仏教・キリスト教などの宗教建築と宗教財産が認められるようになった。

社会主義中国が宗教を受け入れようとしたとき、イスラム教ではまず原理主義（イフワーン派・ゲディム派）優遇の形で進められた。それ以降、メッカ巡礼のために政府は補助金を出しているし、宗教建築は政府が出資し、宗教書も官費で編集出版され、アホンという聖職は政府から給料が出ている。経済の発展が回族から信仰心を奪い、一方で回族出身であることを利用して地位を得ようとする人が増えている。

3　ジャフリーヤについて

「ジャフリーヤ」は中国スーフィズム４大学派のひとつである。スーフィズムについて、黒田壽郎『イスラーム辞典』[14]には次のような説明がある。

> 神秘家をさすスーフィーという語に由来する。スーフィーは世俗的要素をすっかり捨て去り、いわば素っ裸になって神に面し、肉欲、情欲の誘惑を退け、そうした努力により神のうちに帰一し合一して魂の救済を体験しようとする。最も基本的な典礼的要素はズィクル[15]であり、今日に至るまでスーフィズム諸集団の行事の中核をなしている。

ジャフリーヤとはアラビア語の「公開の、声高かの』と言う意味の「al-jahriyyah」を音訳したものである。これを漢字で表すと「哲合忍耶」、「哲赫林耶」、「哲罕仁耶」などが当てられている[16]。18世紀半ば、馬明心によってイエメンからもたらされたものである。

3－1　馬明心の時代

馬明心（1719～1781）はイエメンで20年以上修行し、乾隆10年（1745年）頃帰国。各地を宣教して回り、古くからイスラム教を信仰していた回民に、主（アッラー）の仲介者とみなされるようになった。回民にとっては、それまでアマル[17]を行うためのお布施や聖餐が大変な負担になっていた。そこに出現した馬明心のジャフリーヤはお布施は要らない、聖餐も庭になっているナツメ数個でもよい、という「貧民の宗教」だった。うわさが広まり、やがて甘粛・寧夏・青海・陝西・山東・河北・雲南からも信者が集まってくるようになった。

ジャフリーヤがまず根拠地としたのは循化（現在の青海省循化撒拉族自治県）であった。その時循化にはすでにスーフィズムの花寺派（老教）が広まっており、ジャフリーヤ派（新教）との間に紛争が起こるようになった。花寺派から「邪教」として訴えられたジャフリーヤは循化を追放され、「中国のメッカ」といわれる河州（現在の甘粛省臨夏回族自治州）に進出した。乾隆26年（1761年）のことである。ここでも花寺派との争いは避けられず、また訴えられて追放されたが、その後、関川（官川ともいう。現在の甘粛省安定県）に道堂[18]を建設して活動の体制を整えた。

馬明心が離れた後も、循化ではサラール人の間でジャフリーヤ派の勢力が花寺派をしのぐようになっていた。両派の衝突は双方に死傷者が続出するような宗教闘争になり、乾隆46年（1781年）には清朝が軍を派遣するに至った。それに対してサラールのジャフリーヤ教徒は蘇四十三をリーダーとして反乱を起こし、２、３日の間に循化と河州を席巻した。このことが蘭州の役所に伝わると、内部事情に詳しい人物が甘粛総督に、この反乱の真の指導者は馬明心であると話し、これによって馬明心は蘭州に連行された。蘇四十三はその知らせを聞いて、すぐ蘭州に駆けつけ、蘭州城は反乱軍に包囲された。その騒ぎを収めさせようとして馬明心を城壁の上に連れ出したが、それを見た教徒たちが興奮状態になったので、恐れをなした責任者がその場で馬明心を殺害した。

反乱軍が馬明心救出のため蘭州に行っている間に循化も河州も政府軍の手に落ちてしまい、反乱軍は行き場を失い、蘭州郊外の華林山に立て籠もった。水のない華

林山で、政府軍２万人の包囲攻撃を受けながら、千人ばかりの教徒がおよそ100日間抵抗したのである。そのしぶとさに乾隆帝は怒り、華林山を攻撃している時から、すでにジャフリーヤ関係者を一掃するよう各地に命令を下していた。戦闘終結後、「郷約」という職をつくって監視の目を光らせ、ジャフリーヤ根絶を図った。

３－２　穆憲章（第２代ムルシド）の時代

乾隆46年以降、ジャフリーヤは表面上は全滅の状態だった。しかし、実際にはムルシド[19]の地位は、馬明心の弟子である穆憲章が継承していて、中心地は平涼（甘粛省平涼市）に移っていた。

蘇四十三の反乱から３年後の乾隆49年４月に塩茶（現在の寧夏回族自治区海原県）と靖遠（甘粛省靖遠県）一帯で暴動が発生した。主犯は田五アホンで、馬明心の仇を討つことと、ジャフリーヤ廃絶政策に反抗することを目的とした、同時多発なものだった。田五が亡くなってからも、底店（寧夏回族自治区隆徳県底店鎮）では２ヶ月、石峰堡（甘粛省通渭県）では３ヶ月近く清軍を相手に抵抗したのである。全滅したはずのジャフリーヤが３年後にまた反乱を起こしたことで、乾隆帝は一層ジャフリーヤを目の敵にした。反乱のさなか、および戦後処刑されたりして死んだ者は約１万人、流罪となった者は５千人にのぼった。それでも乾隆帝のジャフリーヤに対する不安は消えず、郷約を徹底させて、内部でスパイ活動をさせた。田五の死後リーダーとなった張文慶は逮捕され拷問を受けたが、最後まで第２代ムルシド穆憲章については供述しなかったので、その存在は清朝に知られることはなかった。穆憲章は嘉慶17年（1812年）に亡くなるまで30年間ムルシドの地位にあったが、瀕死の状態のジャフリーヤ存続のために、表面上はムスリム（イスラム教徒）の義務さえ果たさない不真面目な回民を装っていた。

３－３　馬達天（第３代ムルシド）の時代

第３代ムルシドの馬達天も馬明心の愛弟子である。馬明心自身が「私より偉大なシャイフ（長老、師）はいない。というのは、私はみずから二人の指導者を育てた

からだ」と言っているように、馬明心はジャフリーヤの将来を考えて、後継者を二人育てていた。本拠地は寧夏の霊州（現在の霊武県）に移った。２回目の反乱からすでに30年という年月がたっていたし、その間、各地のジャフリーヤは、極力目立たないような生活を心掛けていたので、馬達天がムルシドになった頃は、清朝による弾圧は軽くなっており、ジャフリーヤは秘密裏に勢力を伸ばしていた。教徒たちが道堂を作りたいと申し出たとき、馬達天は災難が降りかかることを恐れて、はじめは許可しなかったが、あまりの熱心さに建設を認めた。実際には普通の家と変わらないものだったが、結局、官憲に取り調べられ、数人が逮捕された。その中に馬達天が入っていた。役人たちはこれがジャフリーヤであることも、馬達天が主犯であることも知らないまま、彼らを黒竜江の布盔（現在のチチハル市）に流罪とした。

罪人としての辛い旅の途中、馬達天は松花江のほとりの吉林省船廠で亡くなった。嘉慶22年（1817年）のことで、在位は６年にすぎなかった。彼以外の一行は布盔にたどりついて定住し、その後、黒竜江にジャフリーヤ教派を根付かせたのだった。

３－４　馬以徳（第４代ムルシド）の時代

第３代ムルシド馬達天は、罪人として黒竜江に向かう途中、密かにムルシドの地位を息子の馬以徳に継承していた。当時のジャフリーヤは長年の弾圧によって改宗した教徒が多くて弱体化していたが、国家による迫害はゆるんでおり、教徒がスーフィー的儀礼を行うことは可能になっていた。そこで馬以徳は色々な手段を使ってジャフリーヤの儀式を復活させたり、代々のムルシドのゴンバイを作るなど、ジャフリーヤ復興に尽くした。その頃になると、馬明心の妻や子供の流罪地であった新疆や雲南、馬達天一行の流罪地だった吉林・黒竜江においても、ジャフリーヤはかなりの勢力になっていた。スーフィー派の伝教所である道堂も新しく金積堡に建設された。馬以徳は、道光29年（1849年）74歳で亡くなるが、30年あまりの間にジャフリーヤを数十万の勢力にまで回復させ、第一次復興期をもたらしたのだった。

３－５　馬化龍（第５代ムルシド）の時代

馬化龍がムルシドになった頃のジャフリーヤは、海原（甘粛省東部）の田一族（田五の子孫）、平涼の穆生花（第２代ムルシド穆憲章の子孫）、雲南東溝の馬聖麟（馬明心の孫）、貴州に金万照（馬聖麟の親戚）、張家川に李得倉（清朝の高官でありながら、密かにジャフリーヤ教徒として活躍した人物）などが勢力を拡大していた。さらに江南・北京・新彊・貴州などにも多くのジャフリーヤの坊があり、寧夏金積堡道堂との間を使者が往復しているという状態だった。

この頃の清朝は腐敗しきっており、各地で色々な形の反清反乱が起きていた。回民による反乱は先ず陝西で爆発し、雲南に広がっていった。しかしこの頃の反乱はジャフリーヤによるものではない。

同治年間（1862～1874）に入った頃から、甘粛東南部、雲南などで、次第にジャフリーヤも回民反乱に巻き込まれていった。初めのうちは回民軍優勢であったが、次第に政府軍の軍事力に押されるようになって金積堡を頼り、かくてジャフリーヤは全面的に回民反乱に巻き込まれた。同治４年（1865年）穆生花死亡、同７年李得倉投降、同８年雲南東溝が孤立、同９年馬化龍自首、同10年１月馬化龍処刑、10月雲南東溝陥落。これでまたジャフリーヤは壊滅状態になった。

災難が迫っている時、馬化龍は注上師傅を呼び、南に行って教門を立てるよう託した。

清朝は、ジャフリーヤがまた復活することを恐れ、馬化龍を八つ裂きの刑に処した後、首級を、腐乱変形しないように、火であぶって乾燥させてから漆を塗り、約10年にわたって全国の回民集中地で、見せしめのために棒に吊し曝したのである。

二一五

３－６　馬進城（北山・沙溝派第６代ムルシド）馬進西、（南川・板橋派第６代ムルシド）の時代

馬化龍を処刑した後も、清軍は馬化龍の一族を調べ上げ、成人男子は処刑、女子は流罪、反乱当時10歳未満の男児は、11歳になった時点で宮刑に処し、その後で奴隷として地方に送るという刑罰を下した。金積堡陥落当時、馬化龍の孫の馬進城は

７歳、馬進西は４歳だったので、先ずは西安で監禁された。馬進城が11歳になったときジャフリーヤは密かにいろいろ努力したが、宮刑を免れることはできず、流刑地を汴梁（河南省開封市）という近場にとどめることくらいしかできなかった。汴梁での主人は、満州人の小役人だった。ジャフリーヤはこの満州人の家のすぐ近くに店を開いて馬進城を見守っていた。馬進城には逃げるチャンスもあったが、自ら自分の運命を受け入れ、逃げることもせず、失意のうちに光緒15年（1889年）25歳で亡くなった。馬進城は、実際には宗教活動をしていないが、後に第６代ムルシドとして認定された。

馬進城の３歳違いの弟馬進西も、11歳になった時点で宮刑を受けるために内務府に送られることになった。ジャフリーヤは今度こそ北京に到着する前に取り返そうと、監禁先の西安からずっと追跡していた。ついに山西省のコーリャン畑で救出に成功し、汴梁・杭州・山東などジャフリーヤ回民の間を転々として、結局光緒８年（1882年）頃張家川（甘粛省張家川回族自治県）に落ち着いた。

一方、雲南の東溝が陥落する直前、馬聖麟の息子の馬元章は、十数人の追随者と共に地下道を使って脱出していた。彼は色々な手段を使って、馬化龍の孫や妻など生き残っている人々の所在、張家川の李得倉[20]のもとに多くのジャフリーヤが住んでいること、などの情報を手に入れていた。馬進城や馬進西についての色々な指令は馬元章が出していたのである。馬元章は張家川に来てから宗教活動を開始した。馬進西が張家川に来た光緒８年は、各地で曝された馬化龍の首級が蘭州に戻され、それをジャフリーヤが手に入れて張家川に持ってきた年でもある。天下の罪人である馬化龍の首を受け入れることは清朝と直接対決する事を意味し、危険なことであったが、馬元章はあえてそれを受け入れてゴンバイを作った。このことによって馬元章は一層教徒の信頼を得、新しい指導者とみなされるようになった。またこの年、馬元章は沙溝（寧夏海原県）にいた馬化龍の親戚の娘と結婚して、馬化龍一族と血縁関係を結び、寧夏南部の西海固[21]に進出した。

それとは別に馬進西は、李得倉の支持のもと、張家川南川に道堂を建設し、さらに金積堡近くの板橋にも第２の道堂を建設した。つまりここでジャフリーヤは２派

に分かれたのである。しかし教義・儀式などについては両派とも全く変わらない。

3－7　馬元章（第7代ムルシド）の時代

第6代ムルシドの馬進城が亡くなった後の第7代ムルシドが馬元章である。ジャフリーヤは「邪教」とされ続けてはいたが、この時代になると、もはや清朝にはそれを絶滅させるような力はなく、ジャフリーヤは次第に勢力を広げていった。

1911年清朝が滅亡し、中華民国がジャフリーヤの無罪を宣言すると、全国各地に突然ジャフリーヤの寺院や坊が出現した。馬元章は学識豊かな人物で、政府高官や高級軍人とも交流があった。民国8年（1919年）、馬元章はジャフリーヤの完全復活を果たすために蘭州に行き、道祖馬明心や乾隆46年に犠牲となった人々のために、百日間宗教活動をした。

翌年（1920年）、23万人が亡くなったと言われる海原大地震が発生、その時、洞窟の中で修行中だった馬元章は生き埋めになって亡くなった。享年68歳だった。

4　張承志が求めたもの

ジャフリーヤの歴史を書いたものに『心霊史』と『殉教のイスラム』がある。いずれも著者は張承志で、後者は前者を底本として、日本語で書き日本で出版されたものである。当然、内容が重なる部分が多いが、読んだ印象はかなり違う。張承志が『殉教のイスラム』の「まえがき」で次のように述べている。

> 『殉教のイスラム』は『心霊史』をもとにしながら、とくに新たにジャフリーヤの内部資料に一層忠実に回帰して日本語の本書を完成した。本書は、したがって『心霊史』の単なる翻訳ではない。ジャフリーヤ教内資料の初めての公開箇所を多く含み、構成も変えつつ、『心霊史』にあった私みずからの文学的表現を極力圧縮して成ったものである。あまりにもジャフリーヤの立場を鮮明にしている『心霊史』をそのまま日本の読者に押しつけるのは不適当だし、また理解を得るのも不可能に近いと考えたからである。したがって、きわめて客

観的に書くよう努力したうえに出来上がったこの本は、中国語『心霊史』の趣と、いささか異なったものとなったはずである。

要するに『心霊史』はジャフリーヤの立場を鮮明にし、主観的に書いているために、張承志の心情が非常によく表れているのである。以下『心霊史』の文を引用しながら『張承志が求めたもの」について考察する。(『心霊史』から引用した（筆者翻訳）部分はゴシック体を、『心霊史』が他の書物を引用している部分はゴシック体の斜体を用いる。文が長い場合は途中割愛することがある。使用する『心霊史』は『張承志文学作品選集（心霊史巻)』海南出版社出版発行（1995年）である。

４－１　『心霊史』を執筆した動機

①私は人生の分水嶺の上に立っている。もしかしたら、今私は最後の選択に直面しているのかもしれない。肉体と精神がかきむしられてずきずき痛む。霊感が潮のように湧いてくる。暖かい暗黒が、皮膚に貼りついて私を守ってくれている。私は沈黙したまま、この限界線上の感動と不安にじっと耐えている。(前言p1)

②私は興奮しながらも恐怖を感じ、心から自分のちっぽけさを感じないではいられない。私はただ命をかけてその中に入り、その潮の中の一粒の泡となり、岩のひとつの角になりたいだけなのだ。しかし、私が直面している使命はそれらを抽写することだ。(前言p1)

③長い間、私はたった一人で一つまた一つと飛び込んでいった。しかし私は次第に一つの不思議な感情を持つようになった。それは戦士とか男が帰依したい、征服されたい、強大なものに収容されたいと言うような感情だ。私は探しあてた。(前言p2)

④私は最後の決心を下した。私が以前予感によって探し当てた言葉で言うなら、私は最後の旅に足を踏み入れたのだ。これ以上意義のある奮闘はありえない、これ以上すばらしいきっかけはありえない、これほど下層の人々と一体となった文章はありえない。回民は宗教的な意味を具えた決定のことを「挙意」とか

「挙ニーヤ」と呼ぶ。── 私は挙意した。これは最初にして最後のニーヤである。１本のジャフリーヤの筆となり、彼らが生死を願みず守ってくれる本を書くのだ！（前言p7）

⑤ジャフリーヤが私に要求したのは、「世界（の人々）に我々の事を理解させよ！」と言うアムル（命令）だった。私は最初の５年間に、自分を、宗教上で西海固の貧農と全く変わらないドゥスターン（教友）に変えた。その後、西海固や大西北から帰って来て、心が静まって突然沈思している自分を意識した時、私はある種の自信が自分に近づいて来るように感じた。私は密かに自分がすでに大西北の心に触れている事に気付いた。後らの烈士に対する思い入れはずっと絶えることなく私の心を揺さぶっていた。── 私は黙々と誓いを立て、徹底的にこの人道と天理の隊列の中に踏み込んで行った。（第三門p137）

⑥《ジャフリーヤ道統史伝》第三門《船廠太爺》の文は、船廠太爺馬達天が私に残してくれた遺訓なのだと堅く信じている。

高貴なモッラー船廠太爺がこのように言った事がある。「我が正道の創造者ウッカーヤ・トゥッラー（馬明心）がかつて次のように指摘した。「学者がもしただ自分の学問だけに頼って衰弱して死ぬような事があれば、その人の死はカーフィル（無信仰者）と混同される危険性がある。」

私は大急ぎで前後のページをめくってみた。なんとこの章は作家と作品、学者と学問に関する偉大な著作だった。

学問には２種類ある。その一つは心の学問であり、それは有益な学問である。もう一つは宣伝の学問であり、それは神が人類に示した証拠である。

もう一つ、不思議な事にこの宗教書に挿入されている一通の手紙がある。

君はもう知識を得た。── 君は絶対、自分の知識の光芒を消し、自分を暗黒の世界に落とし、舞い戻ってゆかせるような事をしてはならない！君はその光芒を消してはいけない。── 来世になり、他の作者たちが彼らの光芒を頼りに進み行く時、君は暗黒の世界にいることになってしまうぞ！

私はもはや疑い躊躇する事はなかった。この時私の決意は石のように堅かっ

た。私は自分の前世からの定めに背く事は出来ないのだ。(p138～p139)

このような信仰に裏付けされた決意はどのようにして生まれてきたのであろうか？　顔敏著『審美ロマン主義と道徳理想主義』[22] では、張承志が宗教（ジャフリーヤ派）に帰依した原因を３つ挙げている。

（１）定められた血縁である。血縁とは出産によって発生する親子関係で、権利と義務が親族関係によって決定されることを意味する。

（２）自己を救いたいという精神的欲求である。日増しに世俗化して行く世界で、張承志はますます適応できなくなり、「帰るに家なし」という精神的苦痛を感じていた。彼が大西北に足を踏み入れたのは、再び自分の崇拝する対象を確認したかったからだ。再び個人が依存する対象を探し求め、自分を救おうとしたのだ。張承志が自らを救う手っ取り早い方法は、宗教に逃げ込むことだった。

（３）昔の世俗的な崇拝とジャフリーヤとの共通点である。張承志の以前の崇拝は、革命の理想と政治的偶像の崇拝であった。彼は自分の過去を完全に切り捨てることはできなかった。彼は現在も昔の影を引きずっている。彼の昔と今がつながっていることが、革命と宗教を関連づけている。張承志は精神を重んじて物質を軽んじ、理想を追求して現実を蔑視し、神聖なものに憧れて世俗的なものを嫌悪してきた。こうした性格が信仰を堅持すること、彼の人生の主旨とすることを決定づけた。(p85～p88)

張承志の生まれ育ちを考えてみよう。作者紹介で書いたとおり、彼は回族出身である。岸陽子訳『黒駿馬』[23] の解説に次のようにある。

子供の頃、母親が女手一つで一家を養わなくてはならない境遇に育ったが、幼い彼の心に刻まれたのは、回族であるがゆえに味わわねばならなかった体が震えるほどの屈辱と、人波に逆らって毅然として歩む貧しき母の後ろ姿と、狭い路地裏で敬虔な祈りを捧げる祖母の姿であった」(p170)

張承志自身は『紅衛兵の時代』の中で ――「私は回族の家に生まれた。しかしジ

ャフリーヤ教徒との関係がこうした血像によるものとは、私は考えていない。」（p203）とは書いているが、幼い頃から北京という都会で生活しながら、周囲と違った生活習慣を維持していれば、当然血縁を意識せざるを得なかったと考えられる。『心霊史』の中にも『**私はついに母族について書いた**』（前言p11）という一文がある。

清華付中に入り、「紅衛兵」運動に参加する。その時彼は自分なりの「正義」を考えて真剣に戦った。文革時代の「革命大串連」で甘粛・青海・四川・内モンゴルなどに行き、都会とは全く違う大自然のすばらしさを知る。中学卒業後、志願して内モンゴルに行き、４年間牧民生活を送る。そこで推薦されて北京大学の考古学系に入学し、卒業後は中国歴史博物館に配属され、各地の発掘作業に参加する。張承志はここまでは順風満帆、非常に希望に燃えていたのではないかと思う。ところが文化大革命が収束するや、文革の罪悪だけがクローズアップされ、あれだけ「革命」に燃えていたかつての仲間も、みんな手のひらを返したように文革批判を始めた。「あの当時、お前は正義だと思って行動したのではないのか？」張承志にはどうしても文革を全面否定することはできなかった。北京大学に行ったことも、「当時は学力なんか関係なく入れたのだ」と言う目で見られた。彼が中国社会科学院の大学院を受験することにこだわったことが、彼の作品『北方の河』の内容から読み取れる。彼は大学院ではモンゴル史を専攻した。そして1978年から小説を書き始め、処女作『騎手はなぜ母を歌うのか』で全国優秀短篇小説賞を獲得し、1983年には『黒駿馬』で第２回全国優秀中篇小説賞を獲得した。どちらも内モンゴルを舞台とした小説である。ここでまたモンゴル族の人から、何年間か生活しただけでモンゴルの心など分かるはずがないとのパッシングを受ける。もともと寡黙な張承志はますます寡黙になった。そんなときに出会ったのがジャフリーヤであった。

４－２　方法論

張承志は『殉教のイスラム』のまえがきで「史料は重要である。しかし史料そのものが歴史学なのではない」とか、「正しい方法論とは、信仰する教徒たちに保持

されている生き方そのものの中にあるのではないか。旧式の歴史叙述の方法に頼っていては、そうした教徒たちの思いをつぶすことになる」と言っている。張承志はジャフリーヤの歴史を書こうとした時、これまでの一般的な研究方法では、ジャフリーヤ教徒の「心」は書き表せないと考えたのだ。

①私は自分が卒業した歴史系で習った歴史の記述方法を捨て、先人たち、つまり関里爺[24]、マンスール[25]、氈爺[26]の記述方法を踏襲することにした。今日ジャフリーヤ教派内において記憶され、信じられている史実だけを記述するのだ。これは私が生命をかけて書いた本の中から数十万という言葉を削除することを意味する。これは同治戦争の諸々の事件についての発言権を放棄することを意味する。これは私が新たな困難に直面することを意味する。つまり歴史・宗教・文学、三方面からの巨大な挑戦を受けることを意味するのだ。私は注釈をやめにした。巻末の参考文献リストもやめにした。たとえ、それらを探し集めるのにどんなに多くのエネルギーを費やしたとしても。これはアマル（行い）なのであり、金銭出納帳ではない。ややこしい哲学は最低だ。私はジャフリーヤの教衆のように根本的なものを追究したいのだ。筆を進めようではないか。筆も前世の定めを信じている。（第五門p174～p175）

②後に十三太爺と敬称されることになる馬化龍を知るためには、まずその精神を理解する必要がある。少なくともそれに近づかなければならない。市井の俗人、そして宗教と無縁な研究者の感覚では、金積堡を正しく分析することは不可能だ。（第五門p201）

③1949年以後、「農民峰起」はマルクス・レーニン主義歴史学の「五輪の花」の一つとされたため、西北回民峰起を論述した論文はおびただしい数に上った。もちろん、なかには優れた作品も少なくない。だが、全体的に、論者の大多数が清代の文書に振り回されている。ここに深く考えさせられる事例がある。ジャフリーヤ教派内のあるインテリは、金積堡から数里と離れていない所に住んでいた。その彼が、勉学に打ち込んで高等教育を受け、発奮して西北回民戦争について書いたのだが、その著作は白寿彝の編んだ『回民起義』を書き写した

ものに過ぎなかった。十万語を超える長文の中には、清代の公文書が必要以上に羅列され、いかにも公用文書といった雰囲気に満ちていて、年ごと日ごと、堡塁ごとの戦いの叙述に過ぎなかったのである。（第五門p170）

張承志は執筆中にジャフリーヤ関連の先人たちとの一体感を感じるようになる。

④私はかつて一種の重々しい瞑想に陥っていて、よく何人かの人物とめぐり会った。私は彼らと理想・追求・信仰・宗教の本質から、ジャフリーヤが隠滅してしまった秘密まで討論したいと思った。この何年間か、私はこのような精神的な交わりが習慣になっているのだが、時間的に彼らと隔たりがあることをひどく恨みさえする。（第七門p254）

⑤アマル（行い）である執筆活動をするうちに、関里爺と神交の仲になっていくような気持ちになってきた。私は竹ペンを手にした老人を身近に感じる。私は中国語に精通しているが、彼は経典の言葉に精通している。我々二人は対話することはできないが、言葉を交えないで交流することはできる。私には彼を理解しているという自信がある。関里爺という人は毅然とした、善良な白ひげの老人で、竹ペンを握って離さず、アラビア語とペルシャ語の知識が豊富な、顔には清らかなスーラ（品格）の光をたたえた人のはずだ。（第五門p221～p222）

張承志はジャフリーヤに出会う前から、他人とは一線を画するような面はあったが、ジャフリーヤへの信仰が深まれば深まるほど世間と距離を置くようになる。

⑥いつだったのかはっきりとは覚えていないが、中国の知識人社会が人道についてあれこれ騒いでいるのをいやと言うほど聞かされたことがある。私は、彼らに何とも言えない反感を抱き、彼らと共に世俗に同調することはできない、という一種の潜在意識を抱いた。人・人性・人道・人心、こういったものはすべて中国においては別の手段を通して発見しなくてはならない。私は現代中国の知識社会を信じない。重要かつ本質的な知識は、少なくともそれなりのところで形成されなくてはならない。明確な見解は、下等で皮相なカラスの鳴き声ではないはずだ。明確な見解には、風土・歴史、そして本当に私を啓蒙できる先生が必要だし、さらにカラーマ（奇跡）が私に降臨しなくてはならない。そう

して初めて私によって発掘されるのだ。人道は五七幹部学校において両足泥だらけになって努力すれば、完全に理解できるというような生やさしいものではない。こういった思想的意味において、私の10年にわたる文学生活は孤独だった。私はじっと我慢した。冷静に厳しく私を待っていてくれた西海固に足を踏み入れるまでは。(第七門p278)

⑨私は黙って学者の行列から離脱し、翁独健先生および歴史学者の陣営を離脱した。私はさらにきっぱりと作家の行列からも離れた。巴金・王蒙、さらに青年作家である友人たちとも距離を置いた。私は新鮮な世界に近づき、新しい人名を聞くようになった。私にとっては、彼らこそ尊敬に値する中国なのだ。アブドゥル・カーディル、アブドゥール・アハド、マンスール…(第七門p254～p255)

4－3　奇跡

イスラム教においては、カラーマつまり奇跡は非常に重要な位置を占める。張承志は『殉教のイスラム』の中で次のように言っている。

スーフィズム各教派の信者たちは、神秘感を信じ、みずからの信仰と直感を信じる。彼らは俗世間の人々が信じようとしない霊性を抱きながら、カラーマ（奇跡）をかたく信じている。というのは、貧しい彼らの生活はいわば崖っぷちにあるからだ。もし日照りが長く続いて旱魃となれば、もし冬に雪がなくてこの地特有の水溜を満たすすべがなくなれば、また夏に小さな自分たちの耕地に一度でも雹が降れば、たちまち彼らは崖から転がり落ち、死の淵に突き落とされてしまう。(p9)

要するに奇跡を信じなくては生きて行けないのだ。イスラムを信仰すると言うことは奇跡を無条件で信じることなのである。したがって『心霊史』の中には奇跡と言う言葉が随所に見られる。

①ここには神秘的な伝説が満ち溢れている。人はここではごく簡単に奇跡に出会うことが出来る。イスラム教の用語の中にカラーマ（奇跡）と言うものがあり、

この世界においては極めて普遍的なものである。（第一門p8）

②スーフィーの各教派の信者たちはただ神秘感を信じ、ただ自分の想像力と直感を信じ、ただ異変・奇怪・非現実的な事物を信じ、ただ俗世間の人々が信じない霊魂を信じ、ただカカラーマを信じるのだ。（第一門p10）

③ジャフリーヤ教内の秘密写本の中身は、全時代を通してすべてカラーマ、つまり馬明心道祖の奇跡である。漢字を一字も知らないあの大アホンたちは一種の抽象的な力を身につけていた。彼らは抽象 ── カラーマとは俗世と聖界に対する抽象総合 ── を用いて公道の冤直にまさる絶対真理を追求したのだ。人間がこのような真理を得る事は非常に困難である、いやこのような真理に近づく可能性を得る事さえ非常に困難なのだ。真の沈思、つまり、神はすでに沈黙し、悪魔が政権を握り、真空の中で恐怖の感覚に押しつぶされそうな時だからこそ、その真の沈思があって初めて直感と啓示が沈思の中に出現するのだ。（p56）

『心霊史』の中で道祖馬明心の奇跡として挙げられているものを拾ってみる。

④大砂漠の中でついに待望の奇跡が起こった。一人の老人が彼（馬明心）に一房のブドウをくれ、彼をイエメン道堂に連れて行ってくれた。そこはイスラムスーフィー派の伝道所で、彼はそこに住み着いた。そこはちょっと座するも100日間、学ぶには10数年と言う所だった。（第一門p18）

⑤あるタリフという名の第５アホンの子供がマウラー（馬明心）にご馳走しようとした。タリフは心中納得していなかった。マウラーを試すために、彼はマウラーの後につき、道案内はしなかった。しかし何も言わなくても、マウラーはまっすぐタリフの家に着いた。（第一門p27）

⑥無名氏の漢文本《謹著哲罕仁耶道祖太爺歴史》に書かれているものは、純粋なカラーマ（奇跡）である。

３月27日道祖が亡くなったその日の早朝、イエメンのムハンマド・ヘイハホハはちょうど説教をしている時、一声大きな声を発して気絶した。みんなが手当てをして目覚めさせ、原因を聞くと、彼は「シュンニ（中国）のモッラーが亡

くなった」と言った。……昼の礼拝の時、彼は天命を２回拝した時、突然大声を上げて倒れた。みんながまた助け起こして聞くと、「シュンニのあのモッラーの血が無くなってしまった」と答えた。（第一門p53）

⑦（マンスールの『ジャフリーヤ道統史伝』の記事）*彼らは馬明心の遺体を馬繋ぎ場所に持って行って埋めた。それ以降ここに繋がれた馬はすべて病死した。*（第一門p62）

預言も奇跡のひとつと考えられる。

⑧（『ラシュフ』の記事）*この人（穆憲章）は、今は自分のことが分かっていなし、人もその人のことを知らない。アッラーにおすがりしよう！２、３年後、その人も自分のことを知り、人もその人のことを知るだろう。*（第一門ｐ88）

次に第５代ムルシド馬化龍の奇跡・予言について挙げる。

⑨劉錦棠は十三太爺を凌遅の刑に処する時、手に刀を提げ、にたにた笑いながら歩み寄ってきた。彼は十三太爺に尋ねた：今日、私はお前たち一家一族全員、三百人を皆殺しにするが、今後は誰がおまえの後を継ぐというのだ？　十三太爺は答えて言った：地上で「ラーイラーハ・イッラッラーフ」と唱える者は全て私の跡継ぎだ。劉錦棠は尋ねた：だが、誰がお前の仇を討ってくれるというのだ？　十三太爺は予言を口にした：四十年後、私の仇を討つ者が現れる！果たして四十年後、辛亥革命が勃発した。（第五門p210）

⑩（馬化龍の首なし遺体が埋められたところについて）牛がその土地を歩くと、言うことを聞かなくなり、その場で転げまわり、急性伝染病の症状を呈した。その農民は恐ろしくなって、耕すのをやめてしまった。ジャフリーヤはこれを知ると、ひそかにその土地を買い取った。（第五門p211）

⑪十三太爺の一族三百余人は非業の死をとげたが、西府夫人だけは殺害を免れた。なぜならば、誰もが彼女が漢族だと知っていたからだ。この事を、現在ジャフリーヤの教衆は奇跡だと考えている。「十三太爺は西府夫人に言った：おまえは全ての伝教の証を携えなさい。金積堡が陥落したら、こう言うのだ。私が権勢を笠に着ておまえを自分のものにしたと。その後、西府夫人は実家に帰ると

言って釈放された。彼女は八つの箱を携えたが、そのうちの四箱は伝教のイジャーザ（証）だった。十三太爺はこの日のことを見通していたから、彼女を妻に娶ったのだ」と。（第五門p215）

⑫洼上師傅は十三太爺馬化龍にサラーム（あいさつ）を言って別れを告げたが、雨のように滴る涙が止まらなかった。彼は泣きながら尋ねた：「モッラーよ、いつ又お会いできますか？」十三太爺は答えた：「『ムハンマス』[27]で“私は来た（アタイトゥ）”のところまで詠んだら、私はやって来る！」これが有名な「アタイトゥ」の故事である。（第五門p224）

（10年後）

その夜、フフタン（夜の礼拝）の後、伝統的儀式にのっとって人々は跪き、ダーイラ（輪）を作った。経文を唱えながら『ムハンマス』を開き、その晩唱えることになっていた最初のページを見て、洼上師傅は突然慟哭し始めた。洼上師傅は泣きじゃくって声にならず、広げられた『ムハンマス』を指さした。その晩詠むことになっていた最初のページの最初の言葉は、何と「アタイトゥ」すなわち「私はやって来た」であった。（第五門p227）

次は第７代ムルシド馬元章に関する奇跡である。

⑬『十八の鳥雲南を出る」[28]の故事はジャフリーヤのカラーマ（奇跡）史に新しい歴史が始まったことを示している。壮烈に犠牲となった大東溝のジャフリーヤの中で、一部の人が密かに逃亡に成功していた。このことは一種の奇跡だと言わざるをえない。（第七門p258）

⑭（マンスールの『ジャフリーヤ道統史伝』の記事）伝えられる、モッラー・アブドゥール・カーディル（関里爺）は亡くなった後、伏羌に埋葬された。戦乱の中、敵に破壊されないよう、人々は墓を蓮花城近くの小山のそばの空き地に移した。戦火の中、モスクは野蛮人たちに破壊されて廃墟になってしまった。40年後、沙溝太爺がここへ墓参りに来たとき、アホンたちは墓の位置を見つけ出すことができなかった。太爺はかつて墓を移す作業に参加したことのある耳の不自由なアホンを訪ねた。彼はアブドゥール・カーディルの学生だったから

だ。しかし彼はすっかり忘れてしまっていたので、みんな手の施しようがなかった。太爺は地面の焼けこげた棒を拾い上げると、ある場所を指さして、「こちらに向かって掘るのだ！」と言った。みんなが掘ると、その墓が出現した。大事な遺体は無傷だった。確かに、土もワリー（聖者）の肉体を腐食することはできなかったのだ。（第七門p275）

次は乾隆46年の反乱の時の指導者蘇四十三に関するものである。蘭州付近の平均年間降水量は約300ミリ、地方政府は早魃被害のための援助をたびたび清朝に要求していた。

⑮蘇四十三アホンが、渇きによる死に瀕して、コーランを読み雨乞いを後、アッラーの奇跡が彼のために降臨した！阿桂及び李侍堯は上奏文で次のように報告している。

今月１日（旧暦）の虎の刻から巳の刻まで、激しい雨が７、８時間降った。22日の雨に比べると、その勢いはさらに激しく、賊人たちは大いに助けられた。

続いて４日にもまた雨！「６日の大雨は夜中じゅう滝のような土砂降り！７日、８日もずっと降り続いた」と言う有様！乾隆皇帝はものすごい剣幕で怒鳴った。（第一門p58）

6　まとめ

国民の大半が無信仰という国においては、信者の発言はなかなか素直に聞き入れられるものではない。ましてや中国はつい最近まで「宗教は人民のアヘン」として宗教を禁止したマルクス主義を信奉していたのである。信者にとって奇跡は神聖なものである。奇跡について話したり聞いたりする時、信者は身が引き締まる気がして感動する。しかし、信者以外の人がそんな話を聞いても感激するどころか、偶然だとか迷信だと考え、甚だしきに至っては、そんなことを言う人を軽蔑する。

張承志は宗教の中でもとくに激しいジャフリーヤ教派に帰依した。ジャフリーヤの歴史を調べ、教徒たちの話を聞くにつけ、人間としての生き方をそれまで以上に

真剣に考えるようになった。『心霊史』を書くために莫大な資料を読み、教徒からたくさんの話を聞いた。その何もかもが彼の心を打った。その感動的な話を文章にしたいと言うことで、1980年代半ば以降、彼の作品にはイスラムを題材にしたものが多い。

1985年の作品『黄土の泥小屋』。冬の凍りつくような寒さと強風、夏の焼けつくような暑さの黄土高原の山の上の泥小屋に、イスラム教徒の男５人が同居し、雇われてジャガイモを作っていた。彼らはそれぞれイスラムを信仰しているがために侮辱され、反発して罪を得て逃げて来たのだった。彼らは非常に勤勉であったし、多くを望まなかった。しかし、ここでも主人に侮辱されたため、殺そうとして主人の家に押し入る。実際には誰もいなかったのだが、もはやここに住み続けることはできず、また当てのない旅に出るのである。

1989年の作品『西省暗殺考』。同治10年、ジャフリーヤ第５代ムルシド馬化龍は八つ裂きの刑に処せられ、金積堡の教徒は皆殺しにされた。その時、九死に一生を得た４人の男たちが、復讐のため首謀者である左宗棠の暗殺を謀る話である。４人は回民であること、イスラム教徒であることを隠し、普通の漢人の生活を装いながら左宗棠のすきをみて暗殺計画を実行する。それが失敗に終わるたびに一人ずつ死んでゆき、11年後には、同治の乱当時16歳だった依斯児だけが残される。時が流れ左宗棠が死ぬと、その対象を左宗棠の子孫とする。その後、依斯児は事業家として成功し、信望も得た。周りの者は誰も彼の正体を見抜いていなかったが、彼はずっとチャンスをうかがっていた。やっとそのチャンスが訪れ、いよいよ明日実行という日、突然、広範囲で火の手が上がり戦場と化した。これがいわゆる辛亥革命で、40年前、馬化龍が預言したことが現実となった瞬間だった。

張承志にとっては、中国イスラム、ジャフリーヤを書くことによって、その悲惨な歴史を世に伝えると言うのが主要目的ではない。彼はこれによって「人道」とか「人間性」を書きたかったのだ。しかし、張承志は『心霊史』を完成させてからはあまりペンを執っていない。彼自身『心霊史』の中に「この本は私の文学の最高峰である。この本を超える作品が書けるなどとは恐くて言えない。私はこの本をピリ

オドとし、私の文学を終わらせようとさえ考えている。」（p11～p12）と言うくだりがある。

最近インターネットで『墨濃けれども語れず』[29]という張承志の文章を読み、その後の彼の心情が少し理解できたような気がする。とくに心情が表れていると思われる部分を四カ所引用する。

（1）私が中国の回族について『心霊史』を出版した後、中国の一部の知識人は、私を蔑視し、戯画化して宗教狂だとまで言った。この頃ちょうど日本ではオウム真理教の毒ガス事件があり、このニュースは彼らにとっては、かけがえのない宝物となった。彼らは深く考えもせず、たちまちこの事件を私に当てはめた。彼らの攻撃は、私の作品の曲解からもとうに離れ、あるはずのない、私の観点と言うものを作り始めた。……オウムが放った毒ガスが、一部の中国知識人層の拡大を経て、苦しみながら信仰と伝統を守ってきた中国イスラム教を窒息させているとは、誰も気づいてはいないようだ。

（2）私は彼らに「死んでも悔い改めない紅衛兵」と戯画化され、宗教的著作と文学的随筆は専制主義・民族主義に煽られたものと言われている。

（3）既に私は、政治から逃れ、官位と俸給を拒み、あらゆる門閥党派ともけじめをつけて距離をとり、文学を我が道に選んだ。文学、学術、芸術の分野は、十分に広大だと思っていた。しかし、現実はそうではなかった。

（4）あらゆる差別、抑圧と虐殺を受けてきた中国ムスリムの心情を少しでも描いたら、世の中のイスラム世界のすべての現実に、必ず責任を負わなくてはならないのだろうか。

その後のアフガン戦争、同時多発テロ、イラク戦争およびそれに関連するテロなど、イスラム教に対する悪いイメージがどんどん広まっている現在、張承志はますます寡黙になっている。

（付記）
本稿は、平成12年度から14年度までの３年間、二松学舎大学東洋学研究所研究補助費を受けた研究論文である。

注

1）中国の少数民族のひとつで、人口は860万人（1990年）。その祖先は唐代から元代にかけて西アジア・中央アジアから中国に移ってきたイスラム教徒である。長い年月の間に母語を失い、外見は中国人同様になったが、イスラム教の信仰を堅持していたため、単独の少数民族を形成するに至った。さまざまな原因から中国における回族は、靴屋・担ぎ売りの商人・運送屋といった低い階層の職業に就き、農民は地味の痩せた土地に集中していた。
2）この「中学」は「高級中学」を指し、日本の高校に相当する。
3）約２年間実施された紅衛兵の集団経験交流。全国どこに行っても運賃がかからず、宿泊場所・食事も現地で提供された。
4）1991年７月号から10月号　小島晋治・田所竹彦訳
5）1992年　小島晋治・田所竹彦訳
6）毛沢東の「紅衛兵運動の方向は労働者・農民と結びつくことである」という発言に基づいている。
7）イスラム寺院、モスク
8）張承志著『紅衛兵の時代』　岩波新書　1992年　p203
9）預言者とは『神が自らの言葉を伝え、託すために選んだ人間」(『イスラム教の本』(1995年　学習研究社))
10）マホメットともいう
11）イスラム教スーフィー教団の指導者や聖者の墓。
12）この『自治」というのは文字通りの自治ではなく、「優遇政策」である。
13）イスラム教の宗教職能者。
14）東京堂出版　1983年　p215
15）神の名を唱えて、無念無想の瞑想三昧に没入すること。
16）「哲合忍耶」は張承志『心霊史』、「哲赫林耶」は白寿彝の『回族人物史』や『中国伊斯蘭百科全書』、「哲罕仁耶」は『哲罕仁耶道統史』、『謹著哲罕仁耶道祖太爺歴史』に見られる。
17）宗教的勤行、主として祖先追悼のお勤め。
18）スーフィズム伝教センター
19）導師、最高指導者。
20）李得倉は回民反乱の時、ジャフリーヤ存続のために投降するよう馬化龍から指示されていた。
21）寧夏南部の西吉・海原・固原一帯の略称。
22）90年代文学批判叢書　華夏出版社　2000年
23）早稲田大学出版部1994年
24）教名はアブドゥール・カーディル、関里爺は通称。清代の乾隆・嘉慶年間頃の人物で、アラビア語とペルシャ語による『ラシュフ』の著者。
25）馬学智。民国時代のジャフリーヤのアホンで、アラビア語による『ジャフリーヤ道統史伝』の著者。
26）民国時代のジャフリーヤのアホンで、アラビア語による『マナーキブ』の著者。
27）ムハンマドの五言詩体の賛美詩。毎晩５段落ずつ朗誦される。
28）教内に伝えられている言葉で、「18歳の馬元章が雲南を出る」の意味。
29）初出は香港中文大学中国文化研究所発行『二十一世紀』　1997年10月号（第43期）

参考文献

張承志著『張承志文学作品選集（心霊史巻)』　海南出版社　1995年
張承志著『西省暗殺考』　山東文芸出版社　2001年
『張承志代表作』(中国現当代著名作家文庫)　河南人民出版社　1988年
張承志著『殉教の中国イスラム』　亜紀書房　1993年
張承志著『回教から見た中国』　中央公論社　1993年
張承志著『紅衛兵の時代』　岩波新書　1992年
張承志著　岸陽子訳『黒駿馬』　早稲田大学出版部　1994年
張承志著　磯部祐子訳『北方の河』　露満堂　1997年
『世界』(月刊誌) 岩波書店1991年７月号～10月号

顔敏著『審美浪漫主義と道徳理想主義 ― 張承志・張煒論』華夏出版社　2000年
アブドゥール・カーディル著　楊万宝・馬学凱・張承志訳『ラシュフ（熱什哈爾）』台湾商務印書館　1997年
白寿彝『回族人物志 ― 清代』　寧夏人民出版社　1992年
金吉堂著『中国回教史研究』（回族学叢書）　寧夏人民出版社　2000年
馬以愚著『中国回教史鑒』（回族学叢書）　寧夏人民出版社　2000年
傅統先著『中国回教史』（回族学叢書）　寧夏人民出版社　2000年
白寿彝著『中国回教小史』（回族学叢書）　寧夏人民出版社　2000年
馬塞北主編『清実録穆斯林資料輯録』（中国回族古籍叢書）（上巻・中巻・下巻）　寧夏人民出版社　1988年
『中国伊斯蘭教史参考資料選編』（上冊・下冊）　寧夏人民出版社　1985年
『中国伊斯蘭百科全書』　四川辞書出版社　1996年
秦惠彬主編『中国伊斯蘭教基礎知識』　宗教文化出版社　1999年
黒田壽郎編『イスラーム辞典』　東京堂出版　1983年
R．A．ニコルソン著　中村広治郎訳『イスラムの神秘主義』　平凡社　1996年
『中国地名詞典』　上海辞書出版社　1990年
『中国歴史地図集』　中国地図出版社　1987年
『イスラム教の本』　学習研究社　1995年
範長江著　松枝茂夫訳『中国の西北角』　筑摩書房　1983年
松村嘉久著『中国・民族の政治地理』　晃洋書房　2000年